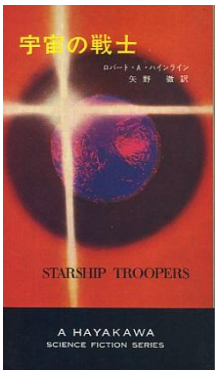
名古屋ＳＦ読書会０５宇宙の戦士2016・04・29

作者・作品紹介



ロバート・Ａ・ハインラインは1907年7月7日、アメリカのミズーリ州バトラー市で生まれた。高校を卒業後アナポリスの海軍兵学校に入学。1929年に卒業した後、海軍少尉に任官された。中尉まで進むが、結核のため1934年に退役し、得意だった数学と物理で身を立てようとカリフォルニア大学大学院に入学した。しかし、再び病に冒され中退。その後、ハインラインは様々な職業を経験する。銀鉱を掘り、不動産を販売し、政治家として立とうともした。当時のハインラインは社会主義者であり、左翼的な立場で活動していたという。いずれにも挫折し、ＳＦ雑誌からデビューを果たすのは1939年、32歳のとき。アスタウンディング誌に「生命線」を発表したのを皮切りに多数の作品を発表し、高い評価を得る。第二次大戦中には海軍工廠のエンジニアとして活動し、執筆は中断。1947年にサタディ・イブニング・ポスト誌に「地球の緑の丘」を掲載して華々しく復活を果たした。初期短篇の多くは独自の未来史に属しており、あり得べきテクノロジーをもとにして未来の日常をリアリスティックに描いている。これらは『月を売った男』(1950)『地球の緑の丘』(1951)などの短篇集にまとめられている。「時の門」「輪廻の蛇」などタイム・パラドックスを論理的に突き詰めた作品もハインラインの得意とするところであり、これを発展させたのが日本で特に人気の高い長編『夏への扉』(1957)である。

1959年に刊行された『宇宙の戦士』は、自身の軍での経験を生かして、理想的な軍隊と社会の姿を描いているが、極端に単純化された暴力肯定的な姿勢は数々の議論を呼んだ。日本でも、1967年の翻訳刊行時に石川喬司がはっきり本書の思想を否定した書評を書いたことに対して読者から反論があり、この議論に反応した読者の手紙を石川喬司がまとめたものが《ＳＦマガジン》1967年8月号に掲載されるという論争となった（『宇宙の戦士』論争として巽孝之編『日本ＳＦ論争史』第２章に再録されている）。その後に刊行された『異星の客』(1961)は、リバタリアニズムを扱ってヒッピーの聖典になっており、決して『宇宙の戦士』に見られる全体主義的思想が彼のすべてではない。『月は無慈悲な夜の女王』(1966)では、月植民地の独立戦争を描き、『悪徳なんかこわくない』(1970)では、若い女性の身体に脳移植をした老人を描くなど、ハインラインの扱う主題はさまざまである。また、1947年の『宇宙船ガリレオ号』から始まるジュブナイルＳＦの系譜も、ハインラインの業績として見逃すことができない。『大宇宙の少年』(1958)など、少年の宇宙への憧れと成長を重ね合わせたハインラインのジュブナイルを読んだことによって、ＳＦファンになったり、宇宙開発に携わるようになったりした人は洋の東西を問わず、数多くいるはずだ。

70年代初期に腹膜炎を患い、回復した後に、長命人ラザルス・ロングの人生を描いた『愛に時間を』(1973)を刊行。その後も一過性脳虚血発作に襲われ、バイパス手術を受ける。病魔と闘い続けた70年代の作品が長篇２作のみだったのに対して、回復した後の80年代には『獣の数字』(1980)を始め５作の長篇を残し、旺盛な執筆意欲を示したが、1988年5月8日に心不全で亡くなる。享年80だった。

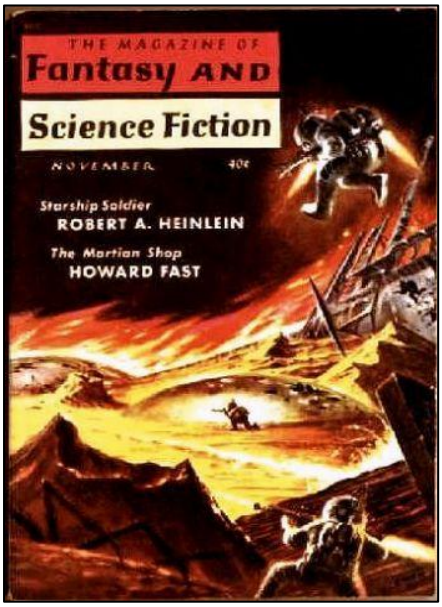
邦訳作品リスト

Ｊ＝ジュブナイル
Ｓ＝創元ＳＦ文庫　Ｈ＝ハヤカワ文庫ＳＦ

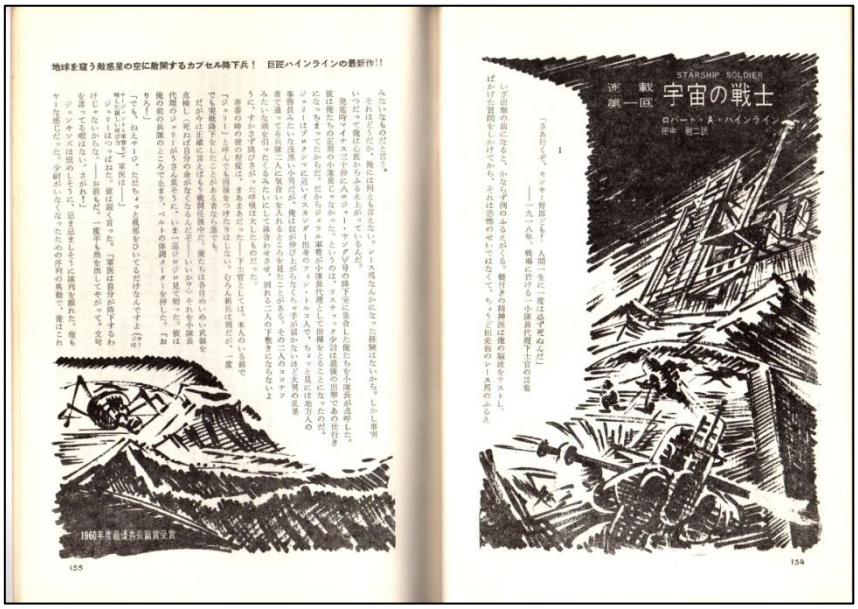
【長篇】
Ｊ『宇宙船ガリレオ号』(1947) Ｓ
Ｊ『栄光のスペース・アカデミー』(1948) Ｈ
『未知の地平線』(1948) Ｈ
Ｊ『レッド・プラネット』(1949) Ｈ
Ｊ『ガニメデの少年』(1950) Ｈ
『人形つかい』(1951) Ｈ
Ｊ『栄光の星のもとに』(1951) Ｓ
Ｊ『宇宙の呼び声』(1952) Ｓ
Ｊ『スターマン・ジョーンズ』(1953) Ｈ
Ｊ『ラモックス』(1954) Ｓ
Ｊ『ルナ・ゲートの彼方』(1955) Ｓ
Ｊ『宇宙（そら）に旅立つ時』(1956) Ｓ
『太陽系帝国の危機（ダブル・スター)』(1956) Ｓ
　／ヒューゴー賞
Ｊ『銀河市民』(1957) Ｈ
『夏への扉』(1957) Ｈ
Ｊ『大宇宙の少年（スターファイター)』(1958) Ｓ
『メトセラの子ら』(1958) Ｈ
『宇宙の戦士』(1959) Ｈ／ヒューゴー賞
『異星の客』(1961) Ｓ／ヒューゴー賞
『ポディの宇宙旅行（天翔ける少女)』(1963) Ｓ
『宇宙の孤児』(1963) Ｈ
『栄光の道』(1963) Ｈ
『自由未来』(1964) Ｈ
『月は無慈悲な夜の女王』(1966) Ｈ／ヒューゴー賞
『悪徳なんかこわくない』(1970) Ｈ
『愛に時間を』(1973) Ｈ
『獣の数字』(1980) Ｈ
『フライデイ』(1982) Ｈ
『ヨブ』(1984) Ｈ
『ウロボロス・サークル』(1985) Ｈ
『落日の彼方に向けて』(1987) Ｈ

【短篇集】
『月を売った男』(1950) Ｓ
『魔法株式会社』(1950) Ｈ
『地球の緑の丘』(1951) ハヤカワＳＦシリーズ
『動乱２１００』(1953) ハヤカワＳＦシリーズ
『失われた遺産』(1953) Ｈ
『地球の脅威（時の門)』(1959) Ｈ
『輪廻の蛇』(1959) Ｈ
『未来史１　デリラと宇宙野郎たち』(1967) Ｈ
『未来史２　地球の緑の丘』(1967) Ｈ
『未来史３　動乱２１００』(1967) Ｈ

▼Ｆ＆ＳＦ1959 年 11 月号より



▼ＳＦマガジン 1961 年 2 月号より



『宇宙の戦士』アウトライン

1章　ジョニー・リコ機動歩兵がロジャー・ヤング号から惑星へ降下する。通称ヒョロヒョロというヒューマノイドとの戦闘。離脱。

2章～6章　過去へ戻って、リコの入隊から基礎訓練キャンプまでの様子が描かれる。

　デュボア先生の思い出。「暴力は、むき出しの力は、ほかのどんな要素と比べても、より多くの歴史上の問題に決着をつけてきたのであり、それに反する意見は最悪の希望的観測にすぎない」

　ズィム軍曹との出会い。「戦争とはある目的を達成するための制御された暴力だ」「いつ、どこで、どうやって――あるいはなぜ――戦うかを決めるのは、そもそも兵士の仕事ではない」

7章　パワードスーツについて。重量 2,000 ポンド、卵を割らずにつまみあげることができる。考える必要はなく、着用すればしたいことができる。

8章　教育について。デュボア先生の思い出。「わたしには“残酷で異常な刑罰”に反対する理由がわからない」刑罰の抑止効果。「人間には、いかなるものであれ、生まれつきの権利などない」仔犬のしつけと若者の教育は同じ。

9章　降下訓練。

10章　ブエノスアイレスが壊滅し、リコの母親が死亡。バグの母星を攻撃し、地表を水爆で壊滅させる。６週間後、惑星サンクチュアリでリコはロジャー・ヤング号に乗り組む。

11章（ここから１章の続き）　ヒョロヒョロは寝返って人類の同盟者として共同で戦うことになる。リコは職業軍人になることを決意する。

12章　士官候補生学校に行く前に、着陸場で父に会う。父は生きていて、機動歩兵となっていた。士官候補生学校での教育。リード少佐との出会い。「われわれのシステムのもとでは、すべての投票者と公職者が自発的に困難な職務にあたることで個人の利益よりも集団の繁栄を優先することを実践してきた」

13章　リコはトゥール号に乗り組んで、士官として働く。惑星Ｐでの奇襲作戦において、数千匹の労働バグと遭遇。リコが意識を失っている内に、ズィム軍曹がバグの巣を襲って６匹の頭脳バグを捕獲する。

14章　少尉となったリコが描かれてジ・エンド。

次回予定

２０１６年　　月　　日（　）

作品（　　）

名古屋ＳＦ読書会ＵＲＬ

http://www.ne.jp/asahi/science/fiction/dokusyokai/